

聖書：I コリント 15:12～28

説教題：眠った者の初穂として

日時：2015年4月5日

しばしば人は死んだ後、肉体は滅びても魂は生き残るという霊魂不滅説をキリスト教のメッセージだと思っている人たちがいます。以前、ある人が天に召されて納棺式をした際、「魂は今、天の主とともにある」と祈った時、そこにいた未信者の親戚の方が「死で終わりではなく、魂は天に行くというのがキリスト教の教えなんですね」と言って来られました。確かにそれはそうです。イエス様は十字架上で強盗の一人に「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます」と言われました。しかしただ魂は肉体の死後も生きるというだけなら、他にもそのように教える宗教はあるでしょう。そういう意味で霊魂不滅説がキリスト教独特の教えではありません。むしろキリスト教の特徴は肉体の復活という点にあります。神は人間を最初、魂と体の両方を持つ者として造られ、それを見て非常に良いと言われました。この両方があって初めて人間です。ですからその人間の救いも、魂の回復ばかりでなく、その体も回復されるというものでなくてはなりません。すなわち魂の不滅性ととも、肉体が復活するという教えこそ、キリスト教独特のメッセージと言えます。

しかしギリシャの霊肉二元論の思想が行き渡っていた当時、なかなかこれは人々に受け入れられませんでした。有名なアテネにおけるパウロの説教もそうでした。途中で人々は聞いていましたが、話が復活に及ぶや否や、人々はあざ笑い、「このことについてはまたいつか聞くことにしよう」と言って去って行きました。

この手紙が宛てられたコリントの教会の中にも、肉体の復活の教えに対して抵抗する人たちがいたようです。彼らはキリストが十字架にかかって三日目に復活されたという事実は認めます。15章3～8節にある通り、当時は多くの目撃証人たちが生きており、これは否定しようのない事実でした。しかしそうでありながら、ある人々は死者の復活はないと述べていました。キリストはキリストであって、私たちは私たちである、と。そんな彼らにパウロは語っています。今日の箇所は大きく二つの部分に分けられます。まず前半の12～19節は「もし死者の復活がないなら」という仮定に立って、それは何を意味するかについて否定的面から語ります。そして後半の20～28節では、しかし事実はどうなのかという肯定的面から、信者の復活と将来について述べています。この二つの区分に沿って見て行きたいと思います。

まずパウロが前半で語っていることは「もし死者の復活がないのなら」ということになるかということです。パウロはここで合計7つの結論を述べています。一つ目は13節にある通り、「もし、死者の復活がないのなら、キリストも復活されなかったでしょう。」これは死者の復活がないなら、キリストも死者の中に入るから、その復

活もないという意味ではありません。聖書の主張は、キリストの復活は私たちの復活のためのものであるということです。ですから死者の復活がないなら、キリストの復活は無意味になり、神がそんなみわざを行なわれるはずはなかったということです。

二つ目は 14 節にあるように、「そして、キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質のないものになる」ということです。3 節以降に「最も大切なこと」として福音の内容がまとめられています。そこに復活が含まれています。その復活がないなら、私たちは実際にはないことを宣べ伝えていることになります。三つ目は同じ 14 節にあるように「あなたがたの信仰も実質のないものになる」。宣べ伝えられ、私たちが信じている内容が空っぽなので、私たちの信仰も実質のないものになります。四つ目は 15 節:「それどころか、私たちは神について偽証をしたことになります。」復活がないなら、神はキリストをよみがえらせなかったはずですが、私たちは神はキリストをよみがえらせたと偽りを宣べ伝えていることになります。これは神に対する反逆です。

そして五つ目が 17 節後半にあるように、「あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいる」ということです。イエス様の復活は私たちの罪が赦されたことをはっきり示すしるしです。そのイエス様の復活がないなら、私たちはなお罪の中にいることになる。その結果、六つ目は 18 節にあるように、キリストにあつて眠った者たち、先に死んだ者たちは自分の罪の中で滅んでしまったことになります。救われていないのです。そして七つ目は 19 節にあるように、こんなことを信じている私たちはすべての人の中で一番哀れな者になります。実質のないことに望みをかけて、結局それはなかった。その上、キリストを信じているせいで迫害され、色々の苦しみを受けている。これはあわれの極みです。私たちは全く愚かで無駄な人生を歩んでいることになります。

死者の復活を否定することはこんなにも恐ろしいことを意味するのです。私たちはパウロの言葉を通して、改めて復活の教理がいかに関わりの信仰の根本的・中心的真理であるかを教えられます。復活はこれによってキリスト教が立ちもすれば倒れもするという、その根幹に関わる教理なのです。果たして私たちの中で復活の教えはそのような中心的な位置を占めているのでしょうか。ただ単に頭の中でキリストの復活のことを知っていれば良いではありません。それが私たちの信仰生活で生きた意味を持っているのでしょうか。私たちの日々の生活の支え、力、慰め、また希望になっているのでしょうか。もちろん私たちは一つを強調するあまり、他の極端に行ってしまうことはありません。復活と同様に十字架ももちろん大切です。十字架抜きの復活だけの宣教は誤った勝利主義に行き着きます。しかし反対に、復活の強調なしの十字架だけのキリスト教には力がない、実質がない、喜びがない、希望がない。この大事な復活の教えにしっかり支えられ、元気づけられ、いのちを与えられる私たちの信仰でありたいと思わされます。

後半は 20 節から始まります。「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」 この「しかし」という言葉は、聖書にある「しかし」の中でも偉大な「しかし」の一つです。それまでのものを全部ひっくり返す力を持つ「しかし」です。似たような言葉はエペソ 2 章 4 節にも見られます。そこでは私たちが罪の中に死んでいた者たちであったことが述べられた後、「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、云々」と語られています。私たちの惨状をすべてひっくり返す「しかし」です。今日の箇所でもそうです。12～19 節で、キリストが復活されなかったら、私たちの信仰はむなしく、私たちはすべての人の中で一番哀れなだと語られました。それを聞いて、そうかもしれない、私はあわれみ人かもしれないなどと説得されないようにしてください。それを全部ひっくり返す力強い「しかし」がここにあります。様々な疑いや思い煩いが起こりそうな中で、この「しかし」という言葉を打ち込んで 20 節を力強く告白することこそ、私たちの力になることです。

ここにキリストの復活は眠った者の「初穂」であると言われています。「初穂」とは、字を読んで分かりますように、麦などの収穫の最初の束を供えることです。その「初穂」にはどんな意味があるのでしょうか。初穂はこれに続くたくさんの収穫の始まりを意味します。この後まだまだそのようなものが続く。すなわちキリストの復活はただそれだけの出来事ではなく、これから起こる本格的な復活の前触れです。従ってこの「初穂」は後に来るものを「保証」するものでもあります。

また、キリストの復活は単に後に来るものの最初のしるしというだけでなく、それらをもたらす原因、また力でもあります。21～22 節に二人の人が出て来ます。最初の人間アダムとキリストです。聖書は人類をこの二人に代表させています。まず最初の人間アダムが全人類を代表していますが、彼が罪を犯したことにより、全人類に死が入って来ました。人は本来死ぬべきものとしては造られていませんでしたが、アダムの罪によって、すべての人は死の力の下に服するようになりました。しかし神はそんな私たちを救うために、新しい始まりをキリストにおいて与えてくださいました。キリストはどのようにして私たちにいのちをもたらすことができるのでしょうか。それは十字架と復活のみわざによってです。イエス様の十字架は、私たちの罪をその身に背負うものでした。その私たちの罪を背負って死んだ方が復活されたという出来事は、何よりも私たちの罪がすべてこの方において精算されたということを意味しています。ですからキリストの復活はキリスト個人の出来事と言うよりも、この方により頼む者たちの運命が変えられた日なのです。死の下に閉じ込められていた状態から、死で終わらない永遠のいのちに生きる人生が開かれた出来事なのです。

しかしある人は疑問に思うかもしれません。ではなぜ信者はすぐ復活しないのか。

まだ誰一人としてクリスチャンは復活していないではないか、と。それに対して23節以降でパウロは、それには「順番」があると述べています。すなわち神が定めているふさわしい順序、時があるのだと。ちょうど今の時期に私たちはたくさんの春の花を楽しむことができます。先週、私も休みを頂いて房総半島で春の花が咲き誇る姿を楽しんで来ました。菜の花列車と呼ばれるいすみ鉄道に初めて乗りましたが、高そうな、重そうな機材を持った中高年の男女のカメラマンたちで列車は超満員状態でした。これはこの時がそういう時期だったからでしょう。沿線を真黄色に彩るその花は年中同じように咲いているわけではありません。そのような時期があるのです。

ここに三つの順番のあることが示されています。第一に初穂であるキリストの復活。第二にキリストの再臨の時にキリストに属している者の復活。そして第三に終わりの時、すなわち世界の歴史が完成に至る時です。ここに私たちの復活はキリストの再臨の日、すなわちイエス・キリストが帰って来られて世界の歴史がそこまで！とされる日に起こると言われています。ここに大きな意味があるのではないのでしょうか。すなわち私たちの復活は今のこの世への復活ではないのです。いまだ悩みに満ち、苦しみに満ち、嘆きの多いこの世への復活ではないのです。こんな修羅場の世界に復活して永遠に生きたところで何の幸せがあるでしょう。こんな世界になら復活したくないと思うかもしれません。しかし私たちは世界がいよいよ新しく更新され、神の御旨にかなった正義の国が現れる時に復活させられるのです。

その最後の段階のことが24節以降にあります。「そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。」今、イエス様は父なる神の右で全世界を治めていると聖書は語っています。キリストはそこで全権を掌握しつつも、救われるべき最後の罪人が救われるまでは悪を完全にはさばいてはいません。しかし終わりの日には、ついに完全な正義を現わされ、あらゆる権威をさばかれます。最後の敵である死も滅ぼされます。その結果、私たちが脅かしていた死の影は消えてなくなります。黙示録にあるように、もはや悲しみ、叫び、苦しみのない、新しい天と新しい地が現れます。万物は完全にこの方の支配のもとで限りなく美しく調和します。そして御子は完成した国を父なる神に渡されて、神がすべてにおいてすべてとなられるのです。万物はここにおいて神と最終的に深く結ばれるのです。それまでの覆いを取り除かれて、顔と顔を合わせて神と相まみえるのです。そして神を永遠に仰ぎ見ての、この上ない幸いな生活が始まるのです(黙示録22章3～5節)。私たちはこの祝福の御国が始まる時にこそ復活するようにと定められているのです。何という素晴らしい最後がキリストにより頼む者たちには用意されていることでしょうか。

この素晴らしい最後の日が来るのを保証しているのが、今日のイースターの出来事です。私たちはまだ私たちの復活を見ていません。それは本当に来るのかと思う時も

あるかもしれません。しかし順序があります。冬が過ぎ去って春が訪れると、多くの花が一斉に咲き誇るように、私たちが復活する時もそのように定められています。キリストの復活は、その日が確実に来ることを予示し、保証する出来事です。私たちはそのことを見て取って、このイースターを心から祝い、感謝し、望みを抱いて喜ぶ生活へ進みたいと思います。地上でどんなことがあっても、その先にこの究極的な幸いがあります。これを先取りして見つめて喜びながら、目の前の一時的な困難を乗り越えることができます。その基礎を私たちはこのキリストの復活の内に持っているのですし、この復活のキリストのいのちに支えられて、やがての究極的な幸いの日に向かう歩みを進めることができるのです。